

當な語法を工夫すべき餘地が見出される。

猶、二三疑問の儘にしてある所をみたが、これらの個所は蒙文と比較對照することが必要である。

以上、秩序なく瑣細な點までも採り擧げたが、要するに纏て出づべき決定版をより完からしめんとの微意より出でたものに外ならないが故に、この點、譯者も必ずや諒とせられるであらう。

最後に、吾等は敬虔の念を以て譯者の決定版への精進を期待すると共に、それが一日も早く出刊されて、今後滿洲史研究の如何なる論文に在つても、常に氏の和譯滿洲實錄が引用されることを望んで止まない。(秋貞實造)

史學科研究年報 第三輯

臺北帝國大學文政學部刊

本書所收の論文は三佛齊考(桑田六郎)・日明交通史上の所謂永樂宣德兩要約の疑問と其真相(小葉田淳)・南洋日本町の盛衰―暹羅日本町の盛衰―(若生成一)の三である。此の中便宜上桑田氏の三佛齊考に就き聊か記し以つて本書の紹介に代へることゝし度い。先づ其内容を讀むに緒言・赤土・室利佛逝・三佛齊の四章に分かつてゐる。緒言に於ては唐時代には室利佛逝、宋代には三佛齊の名を以つて支那に入貢して居るスマトラの王國に關する從來の諸研究の結果に關して記され、三期の發展があつたとし、其迹を辿つて問題の進展を明示すると共に、現在に於ける問題の所在

を指摘して居る。第二節の「赤土」は隋書の南蠻傳に記載されて居る赤土國は南洋の何處にあるかに就いて所見を披瀝したもので、

(一)隋使が馬來半島東海岸に沿つて南下せること、(二)唐代には赤土國の名なく、隋書には室利佛逝なく、而も國情の記述が似て居ること、(三)日又兩國の四至が一致して居る等の諸點から隋の赤土國は唐の室利佛逝であると斷定された。第三節「室利佛逝」の條に於ては唐僧義淨に依つて初めて正確に支那に紹介されるに至つた室利佛逝はスマトラの Palambang なることを明證し、更に此國の唐への入貢に就いて記して居る。唐代の記錄に依ると室利佛逝が始めて入貢したのは唐高宗の咸亨年間で、其以後玄宗の天寶元年の入貢を最後とし、昭宗の天祐元年に至る迄、全く入貢が杜絶した。其理由は如何に解すべきであらうか。これは九世紀の前半に於て室利佛逝の國力が不振に立至つた結果と思ふ。然るに半而隣國の詞陵・瓜哇―が天寶以前に入貢すること少なきに反して、

大曆、元和年間頻繁に入貢して居る。これ即ち兩國の盛衰を示すものではあるまいか。尙ほ進めて言へば、大曆、元和即ち八世紀の後半から九世紀初めに互る詞陵の活動は則ちジャバの *Salendra* 家の活動を意味して居る。ところが此の瓜哇の *Salendra* 家は室利佛逝王家と關係を生じ、後者も亦 *Salendra* 家となり、かくて此王家に依つて室利佛逝の國勢不振が挽回された。天祐元年の佛齊國入貢はかゝる事情に基づくものと解釋される。第四節「三佛齊」の條に於ては唐代室利佛齊と稱した國が宋代には三佛齊として盛んに入貢するのであるが何故に室利佛齊が三佛齊の文字に置換えら

れたかに就いて考へるに、其理由は回々教徒の南洋發展に依ると思ふ。即ち回々教徒の南洋發展は *Tan Khordadcheh* 及び *Sulayman* に依つて詳細に傳へられるところであるが、九世紀の中頃即ち唐宣宗の世には廣州に多數の回教徒が居住して居る次第であるから南洋各地にも同じく僑居して居たに相違ない。彼等の記録に依ると室利佛逝を *Serboza*, *Sarboza* と書いて居る。要するに三佛齊は回々教徒の呼び方が支那に傳えられた爲に斯く宋人が漢字を當てたものであらう。思ふに回々教徒の活動は南洋史上に一時期を劃するものであるが、室利佛齊と支那との關係も是を一轉機と見得るのであつて、「單に國名が印度流から回々教徒流に變化したに止まらず、天寶以後久しい間支那史料に沈黙して居た室利佛逝國と支那との關係が、宋初から俄然復活して來たのは、一に彼れ等の活動に依るものであらう」とし、更に宋史三佛齊に就いて詳細なる考證的註釋を加え、特に三佛齊と瞻卑との關係に就いて論じて居る。宋會要や資治通鑑長編に依れば、元豐年間に三佛齊瞻卑國使が來貢して居る記事が見える。此の三佛齊瞻卑國を以つて二國と考へる（嶺外代答）か、或は兩者を一國と考へる（宋史）かは早くより問題のあるところで、我が國でも桑原博士は二國と解し、藤田博士は一國と解釋して居る。然しながら二國説のとり可からざるは、三佛齊瞻卑國の入貢に際して、宋朝の彼に對する賜與が三佛齊に限られ瞻卑に及んで居ない點から推測出來よう。更に諸蕃志には渤林邦 *Palembang* を三佛齊の屬國に數へて居り、島夷志略には舊港 *Palembang* の他に三佛齊があり、而も *Jambi*（瞻卑）を指

して居る。此の點から、三佛齊の中心が *Palembang* から其西の *Jambi* に移つたものと考へられる。果して然らば *Palembang* から *Jambi* の權力の移轉は *Palembang* 王室が *Jambi* に遷都したと考へるより *Palembang* 王室が没落し、新たに從來その屬國であつた *Jambi* 國が勃興し、從つて *Sriwijaya* 國は衰へて、*Malay* 國が是に代つて興り、*Palembang* は却つてその屬國となつたと考へ得よう。「然し支那史料では三佛齊の入貢は依然として繼續して行く。是は宋人が瞻卑即ち *Negeri* の入貢を三佛齊の入貢として取扱つたとも見えるかも知れぬが、むしろ瞻卑が自ら三佛齊の繼承者を以つて任じ、三佛齊の名を冠し、後には單に三佛齊として入貢したと見る方が事實に當つて居るのではあるまいか」とされ、三佛齊に *Palembang* を都とするものと *Jambi* を都とするものがあつたことを論じ、更に諸種の事情から判斷して、宋の元豐年間には其中心は後者に移つて居たと力説されて居る。

以上極めて簡略ではあるけれど「三佛齊考」に就いて紹介した。言ふ迄でもなく桑田教授は南海史に關して深い造詣を持つて居られる。本論文は其片鱗を示されたものに外ならぬのであるが論文中舊來の遺説を正し、更に一步を進め、或は新見解を披瀝された點も甚だ多い。今此處で其一一に就き詳細な批判を行ふのは紹介者の宜くする所ではなく、別に専門研究者に俟つことゝし度い。唯だ讀後の感想を敢て記すならば、行文の流麗なるにも拘はらず記述は稍々多岐に互り、其結果動もすれば所論を進めるためには左程に必要ななく、それがある爲却つて讀者の理解を混亂せしめる

やうな所がない譯ではない。元來此種の歴史地理的考證を中心とする論文に於いて其理解を困難ならしめるものは論理や内容の深遠によるのではなく、記述の複雑の結果に依るのである。されば所論の本流に直接關係のないものはなる可く註文中に入れて欲しかった。猶亦理解に便するが爲に附圖を作り、更に同地名表の如きもあつたならと思ふ。例へば

赤土＝室利佛齊＝金(舍)の誤、利毗逝＝Śrīvijaya、狼牙須＝狼牙
脩＝郎迦戌＝凌牙斯＝凌牙斯加＝龍牙犀角＝Lessuta＝Langsa-
cogan＝Lankashita.

といふが如くに。此他引用の漢文なども句讀點を付ける親切が欲しかつた。二十一頁の冊府元龜よりの引用文、即ち貞觀五年林邑獻火珠……云得羅利國波利國遣使隨林邑使獻方物の如きは、この儘では讀み得まい。試みに原本に當るならば、

五年(貞觀四年五月の誤)。林邑獻火珠。狀如水晶。日正午時。以珠承景。取艾衣之。即火見云。得於羅利國。波利國遣使隨林邑使獻方物。

と讀む可きかと思ふ。是に依ると單に氏の引用する記事が難讀であるのみならず、元龜の異本にでも依つたものではあるまいかと疑はれる程誤字脱字がある。其前の唐書所引の記事に就いて見ても通行本には與婆利羅利二國使者偕來。となつて居り、矢張二字不足して居る。偶然に原文に當つた二記事が兩者共に斯の如しとすると、他の引用文に於ても、それが稍々讀み難いものと、直ぐに無用な疑ひが掛け度くなる。此他校正不充分的爲に生じた誤植

が屢々目に付く。勿論此等のことは何れも些細のことで、所論の價值をいさゝかも損ずるものでないのではあるが。妄評多謝。(菊版 三八三頁 東京神田神保町二 巖松堂書店發賣) (小野)

Okurt Freysig; Die Meister der entwickelnden
Geschichtsforschung. Breslau, 1936.

著者クルト・フライジヒは、現在ベルリンの教授、古くは「近世文化史」三卷(一九〇〇—一九〇一)や「世界史の段階構造とその諸法則」(一九〇五)によつて、また最近では「史的生成論」(一九二五)や「ドイツ精神とその特質について」(一九三二)等多数の述作によつて、我國の史學界にも既に廣く紹介済みの人であるから、歴史把握に於ける彼の立場なり、十九世紀以來の獨逸史學思想の歴史の線の上に於いて考へらるべき彼の位置づけなりについて、今更に言葉を使すにも及ぶまい。

さて、本書は、題して「發展の歴史研究の巨匠たち」と稱せられる。こゝに云ふ「發展の歴史研究」とは、著者に依れば、個々の歴史事實そのものから出發するのではなく、長き事實の經過から出發し、且つ時間を踰えてそれを相互に統一に於いて結びつけ、何年、何十年を一まとめにして鎖に連結し、或は更に進んで何世紀、何十世紀の連綿たる「連續からまとまつた系列を形づくらんとする、史的對象の取扱ひ方」を意味するものであつて、それは、單に「記述的な歴史敘述との對立に於いて」考へられるものである。従つて「記述的な歴史研究が確かな事實、即ち誤謬を拂ひ落された傳